

論点整理（案）に係る環境保全有識者会議での意見及びその論点整理項目に関連した生物多様性部会専門部会でのこれまでの意見

論点1 トンネル掘削に伴う地下水位変化による沢の水生生物等への影響

論点1の検討項目	有識者会議において出された主な意見	生物多様性部会専門部会で出されていた主な意見
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">分析・評価</p> <p>沢の流量変化の分析</p>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> GETFLOWSをベースにパラメータ等を修正し、再現性を高め、その結果に基づき、上流部の沢の流量変化を分析していく方向の意見が出されている。（水収支解析の再検討） </div> <p>①不確実性を前提とした水収支解析</p> <ul style="list-style-type: none"> 地下水位の低下と地表面の水の流れを解析する手法は、TOWNBY（JR東海モデル）より、GETFLOWS（静岡市モデル）の方が、相対的に親和性が高い。この解析手法をベースに境界条件やパラメータを修正し、ケーススタディーとしてステップを踏んで、再現性を高める。ただし、水収支解析は、変化の傾向は予測できるが、不確実性が前提にあることを共有して議論を進めることが必要。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> トンネル掘削による沢の流量変化の影響は、基底流量の成分を抑えれば、把握が可能、沢の流量に変化が示されたならば、高標高部の調査と同様な地下水面の探査が必要との意見が出されている。 </div> <p>②基底流量（地下水量）の把握（特に渇水期）</p> <ul style="list-style-type: none"> 渇水時に流れ出てくる基底流量の成分が、地下水から湧き出てくる成分なので、トンネル掘削の影響は基底流量を成分で抑え、モニタリングする流れになれば良い。 沢の流量に影響があれば、地下水位の低下と因果関係があると考えられるので、地下水面の探査（高標高部と同様な調査）をする必要があるのでは。 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第9回（前回）会議において、JR東海が初めて沢カルテで示したGETFLOWSによる解析結果を基に、沢の流量変化の分析、生態系への影響を対話した。ただし、データの示し方として、月平均の流量を示すのは不適切と指摘。JR東海との対話はこの段階でストップしている。 </div> <p>①不確実性を前提とした水収支解析</p> <ul style="list-style-type: none"> 国の「大井川水資源問題に関する中間報告」でも示されているように、「導水路トンネルよりも上流側の河川流量は、トンネル掘削とともに減少する」、「トンネル掘削に伴う上流域での地下水位の低下、河川流量の減少、水温、水質の変化などにより生態系への影響が想定される」と想定され、専門部会としても同様な認識の元、その解析には不確実性があることを前提に生態系への影響及び対応策等の対話を進めた。 生物への影響を見るとき、月平均の流量だけで示すのはデータとして不適切（日々の流量変化を見る必要性）。地下水（基底流量）と降雨水とは分けて考えなければいけない。 JR東海の示す沢の流量予測値は平均値であり、渇水期が無いように見える。雨が降らないで地下水だけで維持されているような沢（基底流量）の状態の時、この示された流量予測値が適正であるかは問題である。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 最低の流量の捉え方が不適切、基底流量を示すべきと指摘。JR東海との対話はこの段階でストップしている。 </div> <p>②基底流量（地下水量）の把握（特に渇水期）</p> <ul style="list-style-type: none"> GETFLOWSによる地下水位の低下状況や減水の影響が及ぶと見込まれる沢の平均流量の変化がJR東海から示されたが、生物への影響を評価するには、基底流量と降雨等の直接流出水を分け、最低の流量（幅があっても良い）を示す必要がある。 低水期の設定は非常に重要。水が減る量と低水の流量との関係で、影響の大きさを想定するなら、低水流量（基底流量）は、非常に厳密に測る必要がある。本当の低水期は、厳寒期にある。

		<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> トンネル掘削による湧水と地下水位の低下や沢の流量変化の応答（時間的関連性）を示すデータを示すべき。JR東海との対話はこの段階でストップしている。 <p>③トンネル湧水と沢の流量変化の時間的関連性</p> <ul style="list-style-type: none"> 水収支解析の中では、掘削直後にどうなるかの数値はないと思う。切羽が近づくとかなり早い応答部分があるという前提になっていると思うので、そのデータを示してほしい。
<p>沢の水生生物等の生息状況の整理</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生物等への影響を把握するには、生態系全体としての影響を捉えていく必要性の意見が出されている。 全ての沢を見るのではなく類型化して整理していく方向の意見が出されている。 <p>①生態系全体の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> 沢の周辺の河畔林も含めて、生態系全体として捉えていく必要がある。 水域というか、ライパリアンゾーンというか、川の周辺の植物なり、もしくは生物なりにどんな影響があるかということも、それが仮に下がるようなシミュレート結果が出てくると、そこは注意事項として調べていかなくてはいけなくなると思うので、今できる範囲で観測システムがある程度組めるならば、そこも含めて組んでいけるような方向を見たい。 事前の確かな科学的なデータが必要であるが、調査が不十分な状況。バックグラウンドデータとして蓄積してほしい。 	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生態系の把握していくために、生態系の構成種や詳細な食物連鎖図を示すように指摘。JR東海による調査がどこまで進んでいるのか、専門部会にはまだ示されていない。 <p>①生態系全体の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> 南アルプスは、貴重で脆弱な生態系で構成されている。生態系の観点では、食物連鎖が重要。丁寧な生態系への配慮が必要。 重要な種だけに注目するのではなく、<u>普通種も含めた生態系全体を捉える必要性</u>がある。 生物の影響を見るためには、<u>沢1本1本を区別した方が</u>良い。 河川に近い林床の植物は、<u>地下水と密接に関連している可能性があり、注意が必要（河川の水位と地下水との関係をチェックする必要性）</u>

<p>沢毎の水生生物への影響分析・評価（沢カルテの作成）</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沢カルテにおいて、物理的及び生物的情報を整理する。それを類型化して、生態系への影響を分析・評価していく方向の意見が出されている。 <p>①分析・評価に必要な検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沢カルテについては、物理的な情報と生物的な情報がきちんとあって、それでどうやったら具体的にその影響を最小化できるかといったような流れがカルテの中に出てくるといい。 ・沢カルテをすべてチェックするのは厳しい。典型性などの性質で各沢を分類し、食物連鎖や他との連続性の中で見られるようなことを議論したら如何か。 ・環境（立地条件等）別に類型化して、生物間の相互作用食物連鎖を作っていくって、その中でキーパラメータがどういう形で変わるのか、どうなることが予測されるのか、そんな形で取り組んでいければ良い。 ・類型区分として、①流量、②水温・水質の水環境、③沢の地形・生息場所、④生物の生息状況、に分類することを提案 ・大事な視点で底質とか河床材料、住み場所としては重要な要素になってくる。 ・土砂生産の量というのを併せれば、少なくとも底生動物の種組成を評価する際には極めて重要だと思うので、そういった状況も踏まえた上で、地下水の変化に対してどうするかというのを見ていただければ、より科学的に客観的な評価ができる。 ・目標は、トンネル掘削の影響がないような形で対話していくことだが、生物への影響を見ていかなければならず、目標値となると相当難しい。 	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沢の流量が変化（どの程度の減少）したとき、生態系にどう影響を及ぼすのか、JR東海から、まだ具体的に示されていないため、影響の分析・評価に係る対話に到っていない。 <p>①分析・評価に必要な検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トンネルで湧水が出たときに沢や上流部で何が起こるのか、そのとき生物にどう影響を及ぼすのかを整理しておく必要がある。 ・生態系の構造は、食物連鎖を調べるかによって、影響の大きさが分かってくる。 ・流量の減水は、生物学的な問題と工学的な問題は異なる。生態系は、ゼロでは生息にかかわること。データをしっかり認識して、どういう保全措置をとるのか示すべき。
	<ul style="list-style-type: none"> ・上流に関しては、時間平均だとか空間平均では駄目で、微小なマイクロのところで見っていく必要があるので、また、時間的にもどのように変化していくのかというのを見ていく必要がある。（注：有識者会議では、静岡県オブザーバーとしての発言） 	

<p>保全措置</p>	<p>回避・低減・代償措置の検討</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保全措置の検討項目の優先順位は、回避、低減、どうしても駄目なときに代償措置という方向性で議論していくとの意見が出されている。 <p>・回避、低減というところをまずやって、それがどうしても駄目なときに、代償の議論があるはず。どの程度低減できれば、生態系として維持できるのかといった議論も多少やっていかざるを得ない。JR東海のほうにも、最初から代償に行ってしまうのではなくて、その前の議論をしっかりやっていただきたい。</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トンネル掘削によりどういう影響が生じるかを明らかにした上で、まずは、<u>回避、低減措置の対話をしっかり行っていく段階である。</u> <p>・自然環境を保全するための措置、低減措置をしっかり行った上での事前の代償措置であると認識している。</p> <p>・湧水を減らす対策だけでなく、水が減ることに対し生物の基本的な保全対策を考えるべき。</p> <p>・<u>トンネル湧水の低減のための薬液注入は、圧力に対し、どの程度の湧水の低減効果が期待できるのか検討してほしい。</u></p> <p>・回避、低減、代償措置に加えて、生態系が傷んだらどのように回復させるのかという「修復」も大事である。</p> <p>・事前の代替措置として、生物多様性オフセットという考え方もある。</p>
<p>モニタリング等</p>	<p>モニタリング・リスク管理</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物を指標種とした閾値による環境管理や順応的な管理手法によりモニタリングしていく方向等の意見が出されている。 <p>・どういう生物を指標種にして、どういう閾値を考えて環境管理するのかというふうな議論をもう少しやられるのがいい。</p> <p>・アダプティブというか、順応的にまずはこの方向でいくべきじゃないかということを出した後、モニタリングを実施する。ただ漫然とモニタリングするのではなく、プランBを用意しておき、どんな状況になったらプランBを検討するかを持っていないと、それが機能しないのではないかと思う。</p> <p>・自然界の持つ変動性、その変動幅に対して、トンネル掘削でどこまで流量が変化するか、これを見比べて最小限に抑えたいという管理値的なものになるのかなと個人的には思う。</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トンネル掘削により生じる沢の流量変化は、不確実性があるものの、その影響を予測する。その結果に基づき、生態系への影響の分析・評価を行う。その上で、事前のリスクを回避、低減する管理値（閾値）を設定して、モニタリングによりリスク管理を行っていくようなシステムの構築の必要性を伝えた。<u>JR東海からは、生態系への影響が具体的に示されず、また、管理値の設定は難しいとして、対話が進んでいない。</u> <p>・<u>湧水量の管理値は、地質構造・水資源部会専門部会で仮に設定したもの。生物多様性を考慮しているわけではなく、生物多様性の観点から検討していく必要がある。</u></p> <p>・対策のために色々調査しているが、どう生かすのか、工事後のモニタリングにどう生かすのか見えない。</p> <p>・<u>リスク対応は、通常時と非常時の二つに分けてイメージする必要がある、数値を用いるなどして判断基準を明確にする必要がある。</u></p> <p>・事前のリスク把握を検討しなければ始まらない。モニタリングだけではリスク管理にならない。</p> <p>・全体の課題は、この環境影響評価で、リスク管理システムをどのように作っていくか</p>

【資料5】

にある。沢をモニタリングしていたら、想定（閾値）より減ってしまったときどのようにするのかあらかじめ管理システムの中に決めていく必要がある。モニタリング結果をどう生物を守ることに生かすのかを作り上げていかないと影響評価にならない。

- ・事前調査したデータが相当変動するものとして把握し、モニタリングの変動と比較するという形でしか影響は把握できない。
- ・河川流量の過去の最低値を管理値とした場合、（トンネル湧水の対策と沢の減水とはタイムラグがあるため）
渇水の年には大きな影響が出る可能性があり、管理値と設定する考え方は適当でない。

論点2 トンネル掘削に伴う地下水位変化による高標高部の植生への影響

論点2の検討項目	有識者会議において出された主な意見	生物多様性部会専門部会で出されていた主な意見
<p style="text-align: center;">分析・評価</p> <p style="text-align: center;">高標高部の調査</p>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地表面の植物は、地表付近の水循環により生育していることを証明する調査方法をJR東海から示され、議論している。 ・ 現在示されている調査方法では、深層部の地下水の関与の可能性に対しての答えとなっていないとの意見も出されている。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌粒子と粒子の間に、負圧というか、毛管で保持されている水を使うのであって、飽和帯の水を使っているわけではほとんどない。湿地の植物は別だが、高山帯のお花畑がどういう形で保全できるのかというのも論点の一つ ・ 帯水層の変動と水分が連動しているかどうかとか、もしくは雨の量に対して土壌水分量がどう連動するかとか、その辺の関係が見えると思う。その提案事項を、この有識者会議に提案する。 ・ どういう注目すべき景観があるのか、その立地条件をしっかりと類型化して、議論して、そこに観測のシステムを個別に考えるべきだというところの設計をやらないといけない。 ・ 調査時期の適正について検討されたのか。土壌に水のある時期、ない時期の変動があると思うので、調査時期についてしっかり検討してほしい。 ・ 土壌水分の測定に関して、降雨の量と土壌水分の関係が非常に重要。 ・ 深層部の地下水がどう関わっているのかが抜けていて、地下水の関与の可能性に対して答えていない。 ・ 水の採取時期は、成分の標準値にも関係することから、調査時期を明確化し調査時期による違いも調査することが必要。 ・ 電気探査は、雨の降る時期か、乾燥する時期かによって、データが違うのは当たり前である。乾燥している時期と、その直後にもう一度調査し、その差から詳細が分かるので、2回の調査を検討願う。 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地表面の植物は、地下水位の低下との関連性がないことを、科学的根拠を持って示すようJR東海に対して求めてきた。 ・ JR東海からは、既存文献等から表層は独自の水収支で植物が生育しているとの説明はあった。しかし、破碎帯などで地下水とつながっている可能性は否定していない。つながっていることを判断する基準は示されておらず、その対応等は示されているものの、<u>対話は途中で進んでいない。</u> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>地下水位とつながっていない、表層は表層で独自の水収支で植物を育てているという解釈ではなく、地下水とつながっていて水の変動も起こる可能性があるというところを予測して何らかの対応を考えるべき。</u> ・ <u>仮に地下水位が下がるという場合、全く表層の植物に影響を与えないのかを科学的に説明すべき。</u> ・ 繊細で脆弱な稜線のお花畑と地下水との関係性について大変心配している。南アルプスでは、岩盤の割れ目に水が十分含まれ、あのような植生を形作っている。破碎帯など岩盤の亀裂に水が含まれているところは、地下水とつながっている可能性がある。<u>調査は、千枚の湧水箇所より高い場所で行ってほしい。</u> ・ カールは特殊な地形であり、示された手法では稜線部のお花畑の植生保全に対する説明として適切ではない。 ・ <u>亜高山帯の生態系は影響を受けやすいので、この地域のお花畑をどこか一箇所事例を追加してほしい。</u>
<p style="text-align: center;">高標高部の調査</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水が地下から供給がある土壌水の分布なのか、それとも、下に抜けていく状況なのかシミュレーションと実測を比較することで角度の高い情報が得られる。 ・ 降雨により浸透してくる水と毛管現象により吸い上げてくる水の両方で水分が多くなってくるとすれば、降雨による浸透が少ない時期のデータを見て、どのくらい水量が減っていくのかという話を一緒にしていかなければならない 	

	植生の水分供給経路の分析		
	生育場の類型毎の高標高部の植生への影響分析・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ どのような注目すべき景観があるのか、その立地条件をしっかりと類型化して、議論して、そこに観測のシステムを個別に考えるべきだというところの設計をちょっとやらないといけない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>成分分析について、地表水が地下に浸透すれば少なからず成分は変わってしまう。どのような条件であれば表層水と地下水が同じ由来であると判断できるのか検討してほしい。</u> ・ この判断により次の対策への意思決定が行われるため、表層水と地下水との関係について、同じものを由来とする水であると実証するための基準を定め、明文化すべき。
保全措置	回避・低減措置の検討		
モニタリング等	モニタリング・リスク管理		<ul style="list-style-type: none"> ・ お花畑付近の地下水とその他の地域の地下水が繋がっているようであれば、工事を中断するとの記載がされた。事前に調査するわけではない点は意見があるが、初めて「工事を中断する」という記載がなされたことは評価する。

論点3 地上部分の改変箇所における環境への影響

論点3の検討項目	有識者会議において出された主な意見	生物多様性部会専門部会で出されていた主な意見
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">分析・評価</p> <p>作業ヤードから放流するトンネル湧水等による環境への影響分析・評価</p>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生態系への影響では、SSや重金属以外にpHにも注目という意見や、生活排水の課題、河川との排水合流部の形状という視点での検討が必要といった意見が出されている。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 生態系への影響を考えると、SSと重金属以外にpHの影響というのが一番大きいということで、pHに関してもどうなのかということを知りたい 生活排水について、南アルプスの汚れのない河川に、環境基準に合致する値だからということで放流して良いのか。 <ul style="list-style-type: none"> 河川に対し構造物がどういふ影響を及ぼすか検討しなければならないテーマとなるが、その項目が欠けている。地下水や発生土置き場の排水口自体も水循環としては生息場を形成することになる。排水合流部の形状をどうするかという視点も不足している。 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> トンネル等からの排出される水の水質・水温に対し、南アルプスの清流や水生生物への影響を勘案した適切な水質基準等を検討すべきとの意見に対し、JR東海から、環境基準に準拠、機械の浄化能力から管理基準値が提示されているが、<u>対話の結論に到っていない。</u> </div> <ul style="list-style-type: none"> 表流水のpHとか、溶存酸素量は、1日中で変化するが、地下水と表流水は違うので、そのまま放流して良いかを考える必要がある。 <u>南アルプスの上流部の河川の水質は、全く汚れのない清水である。この水質の保全に関して、生活環境に関する基準だけで良いのか。上乘せした浄化対策が求められる。</u> 薬液の成分が水に溶け出して出てくる危険性がある。 河川に排水するところで、どのくらいの<u>溶存酸素</u>があるかが一番重要である。 <u>重金属等水質対策については、排水基準を満足すれば良いという話でない。南アルプスという特殊な環境下でどのように処理したら良いかがポイントである。</u> <u>水温</u>については、冬期の状況は11月以降でないとは分からない。水温が下がると溶存酸素量も変わるのでもう少し調べる必要がある。 排水の管理の中に<u>大腸菌群数</u>など、一般的な衛生管理の必要な検査を加えるべき。 滅菌処理方法として<u>塩素</u>を使うことに問題がないか検討すべき。 生物の保全には、水の量だけでなく<u>水温</u>も重要である。冬期に温度差が大きくなるわけですが、対策がどこまでできるのか。どのくらいの設備をどれだけ作ればこのくらいの効果（河川の水温に近づける）があるという推定でき、その場になってやることは難しいので、あらかじめ予測し、仕組みを作っておくべきである。 <u>溶存酸素量の問題は、環境基準に合うからオッケーでは困る。ここは、いつもほとんど過飽和の水が流れているところであるので、大井川上流の水に合うかどうかの基準で考えるべき。</u> <u>浄化槽が壊れたときの対応</u>、汚水を流さないことが前提である。

	<p>残土置き場等による環境への影響分析・評価</p>	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豪雨の影響など外部要因に対しての環境の安全性や生態系を良くしていくために跡地をどう使っていくかという知見があまりない。 ・河川との排水合流部の形状という視点での検討が必要等の意見が出されている。 <p>※地質構造・水資源部会では、<u>構造的安全性の課題について対話を継続中</u> また、<u>要対策土置き場については、県条例上不適</u> <u>有識者会議では、J R東海が現在計画している場所で議論を進めることとしている。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生土を搬出あるいは搬出前段階の工事によって出てくる濁りや土砂が生態系に与える影響や、置土後に大きな出水の際に流出する土砂の影響が懸念される。現状の土砂量や攪乱時の濁り等のデータをあらかじめ取っておく必要がある。 ・発生土置き場ができたときの構造物としての安全性、2つ目が環境の安全性で、環境の安全性については大きく2つに分かれていて、中に入っているものから有害物質とか危険物質が出てくるかどうかという問題と、そのもの（有害物質）が（外に）でてきたときに周辺環境に悪い影響を与えないかという2つの問題がある。 ・これに加えて、最近豪雨の影響というものが外部要因として両方にかかってくる。既存の知見で整理できている部分が最初の2つ（構造物の安全性と環境の安全性）である。 ・豪雨への影響という部分と、この後、生態系をよくしていくためどう使っていくかという部分があまり知見がない部分 ・排水箇所には、構造物が付随する。その際に河川に対し構造物がどういう影響を及ぼすか検討しなければならないテーマとなる。地下水や発生土置き場の排水口自体も水循環としては生息場を形成することになる。排水合流部の形状をどうするかという視点も不足している。 	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大井川は、大雨のたび流れを変え、扇状地を削っていることが繰り返されているような場所であり、想定外の災害が発生する昨今、河川沿いに設ける発生土置き場の安全性について、対応を求めているが、J R東海との対話は<u>この段階でストップ</u>している。 ・要対策土については、オンサイト処理を検討すべきとの意見もあった。 ・発生土置き場の緑化、自然復元については、計画書が出てきた段階で、詳細を対話していく。 <ul style="list-style-type: none"> ・大井川は、大雨のたび、河川の流れを変えて扇状地を削って行くことが繰り返されている。<u>こうした現象をしっかりと捉え安全の対応を求める。</u> ・今回の工事で、360万m³もの量の盛り土が出るが、豪雨などで予想外の自然災害が発生する昨今において、J R東海はどのような対策を考えているのか示して欲しい。 ・盛り土について、J R東海は崩れることを想定したくないとの説明があったが、これはリスクマネジメントが理解できていないということの証左である。 ・<u>地域生態系に配慮した緑化工法を採用</u>すること、審議は、計画書の出た段階で行う。 ・<u>外来種を持ち込まないように注意</u>することを、基本的な認識にしてほしい。
<p>保全措置</p>	<p>回避・低減措置の検討</p>		<p>（地質構造・水資源専門部会における意見）</p> <p>○通常土の処理（ツバクロ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ツバクロの上流に位置する上千枚沢は、大規模な深層崩壊の形跡が残っている。上千枚沢で深層崩壊による土石流が発生した場合、大井川が河道閉塞により、河川水位が32m上昇する。その結果、盛土法面が崩壊するおそれがあり、リスクを考慮した設計をする必要がある。 ・大規模地震の設計方法として、現在J R東海が行っている「円弧滑り法」は十分ではない。他の方法で検討すべきである。 <p>○自然由来の金属を含む要対策土の処理（藤島）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「静岡県盛土等の規制に関する条例」では、有害物質を含む土砂基準に適合しない土砂等を用いて、盛土することは原則不可である。 ・水源に有害物質を含んだ盛土を置くのは不適切であることから、オンサイト処理を検討すること。 ・要対策土が少量であれば、域外処理という考えはないか。 ・基準を超過していないとして、岐阜県多治見市の処分場に搬入された残土を、岐阜県が分析したところ、環境基準を超えるヒ素とフッ素が検出された。この事例を鑑みて、対策を検討する必要がある。
<p>モニタリング等</p>	<p>モニタリング・リスク管理</p>		

※ の概要は、事務局で有識者会議及び専門部会の議論の要点や進捗状況をまとめた。それ以外は、議事録から各項目に係る主な意見を抜粋した。